北齋漫畫

矢代静一

三幕戯曲

河出書房新社

北齋漫畫

代静一

河出書房新社

北齋漫畫

著者　矢代静一
発行者　中島隆之
発行所　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町3―6
電話　東京二九二・三七一一
振替　東京一〇八〇二
文弘社印刷・大口製本

昭和四八年六月二〇日　初版印刷
昭和四八年六月三〇日　初版発行

定価七八〇円

乱丁・落丁本はお取替えいたします

© Seiichi Yashiro 1973

0093-037324-0961

北齋漫畫

（川裤）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

登場人物

鉄蔵（葛飾北斎）――35歳～90歳

左七（曲亭馬琴）――28歳～82歳

中島伊勢――鉄蔵の養父　55歳～亡者

お栄（応為）――鉄蔵の娘　15歳～70歳

お直――身許不明　妙齢～亡者

お百――左七の女房　31歳～亡者

伍助――丁稚　19歳～亡者

もう一人のお直――妙齢

もう一人の伍助――19歳

時

寛政六年（一七九四年）から、
嘉永二年（一八四九年）の
五十六年間にまたがる。

第一幕

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

1

寛政六年の春の昼下り。

江戸、本所横網町にある、御用鏡磨師中島伊勢の豪邸内。

庭の切株に腰をおろしている鉄蔵とお直。

鉄蔵とは、勝川春朗と名乗っていたころの、のちの葛飾北斎のことである。

三十五歳の男盛りで、長身、筋肉質でみるからに精悍な風貌である。

常に人を見くだすような傲慢さがある。

お直は二十四、五歳に見えるが、少女のあどけなさが残っている。といっても堅気の娘にしては、妙に色っぽい。

鉄蔵　（激しい口調で）なにか、こう、ふうっと、なにもかもが嫌になっちまうことがあるんだ！　空が急に暗くなったかと思うと、見る間に、夕立がざざざざあッとやってくる！　夕立なんだから、どこかの軒下で雨宿りして、止むのを待って

りゃいい、そう抜かす奴がいる。そんなのはめめしいやナ。だもんで、ずぶ濡れになるのを承知で歩き出す、だんだんはずみがついて、駆け出す、駆け出したら、もうとまらねえ、どこに向って駆けているのか誰にも分らねえ。そりゃ、そうだ。駆けてる御本人が、そもそも分っちゃいねえんだ。ただ分ってることは、たった一つ、なにもかも捨てて、もう一遍新規蒔直しだ！　そういう想いで胸の中がいっぱいになってるってことよ。こいつは、やけっぱちとは違うんだなア、俺は駆けながら、へこたれちゃいけねえぞ！　すってんころりんと転ぶ、どろんこになる、平気の平左だ。軒下で雨の止むのを待ってる奴等は、ぶざまな俺の恰好みて笑う。ふん、分ってたまるか、そんときの俺の気持が。さわやかなんだよ、駆ける、駆ける……そう、俺は、もう一度、俺自身を賭けてるんだ。分るめえな、女のお直さんには。

お直　（首をかしげる。目が笑っている）……。

鉄蔵　また、その目か。

鉄蔵はお直の手をきつく握る。乱暴に抱く。

お直は、身をかたくする。

鉄蔵　なんにもしやアしねえよ。そりゃ、お前を手ごめにすることだって出来る。けど、そんなことしたって、勝ったことにゃならねえ。勝つときってのは、お前の方で、すすんで俺に身をまかせようって気になったときだ。

お直　……。（肩の力を抜いて、鉄蔵の胸に頬を埋める）ね、お栄さんって、ほんとにあんたの子？

鉄蔵　自慢じゃねえが、俺が十九の年のとき生れた子だ。で、その年の大晦日に、女房と別れたのは、そんとき、俺の心に夕立が降ったからさ。（笑う）

お直　そのあと、どれくらい夕立が降ったのですか？

鉄蔵　（指をせわしげに折って数える）……。

お直　嘘、そんなにたくさん。

鉄蔵　嘘なもんか。お直さん、俺はな、もてすぎて弱ってる。

お直　（あどけなく笑う）そう言えば、はじめてお会いした夜も、私にたいそう自信ありげの御様子でした。

鉄蔵　てっきり、客の袖引く商売女、つまりは夜鷹だと思ったから、よけいいい調子で声がかけられたんだ。けど、なんだぜ、恩にきせるわけじゃねえが、俺でよかった。あんな夜ふけの両国橋のたもとの、薄くらがりの柳の下でよ、女が一人ひっそりとたたずんでりゃ、男なら、誰だって、助平根性を出さアな。

お直　私、道に迷って、途方にくれていたんです。

鉄蔵　それにしても、ものを知らなすぎる。

お直　鉄蔵さんも、ものを知らなすぎるのではないかしら。（又、目が笑っている）

鉄蔵　なんだって。

お直　道に迷って途方にくれてると言った女の言葉をすぐに信用して、御自分の家に引取って下さる人の方が、よっぽど……。

鉄蔵　ものを知らなすぎるか。（笑う）

お直　やはり、絵かきさんだけあって、世間知らずなんですね。

鉄蔵　浮世のわずらわしさをなんでも知りつくしたようなものいいじゃねえか。そういうお直さんがかわいいのさ。

お直　（舌をペロリと出し、おでこを軽く叩き、首をすくめる）……。

鉄蔵　けど、なんだって、お直さんは、身の上話を俺にしてくれないんだ。どんな家に生れて、どんな風に育ったか、ほんのこれっぽっちもしゃべっちゃくれねえ。水臭いじゃねえか、もうかれこれ十日あまり一つ屋根の下で暮してるのに。

お直　謎に包まれている女の方が殿方には面白いのじゃないかな。嘘、嘘、私は体を売って暮してる女、なの。（目が笑っている）

鉄蔵　俺も絵かきのはしくれだ、自分の目を信じている。お前は商売女じゃねえ。気にいってるんだ。いまの俺には、お前はてごろの絵の材料なのさ。

お直　あら、材料だったの、私。

鉄蔵　そうにきまってらアな。けど、ひょっとすると、今日で、「あばよ」ってことになるかも知れねえ。

お直　旅にでもでるんですか？

鉄蔵　（一瞬卑屈な表情になる）多分、お前がな。

お直　あら、どうして？

鉄蔵　お前、若い男より、年寄の方がこのみだって言ったな、二三日前、屋台で夜泣きうどんすすったとき。

お直　そう、お年寄って、甘やかしてくれるし、だまされたふりしてくれるでしょ。

鉄蔵　ま、この十日あまりってもの、三度三度、飯食わせてやったんだ、人間、恩を忘れたら、犬畜生にも劣るぜ。（体をなめまわすようにお直を見る）けど、もうすこし、お前を写生してみたかったな。

中島伊勢登場。渋好みの趣味のよい身なり。一徹そうな老人というより壮年。

鉄蔵　（急に調子よく、下手に出る）おやじさん、御無沙汰しております。

伊勢　何の用だ。

鉄蔵　金の無心で、へえ。

伊勢　この娘さんは？　（鋭い視線でお直をみつめる）

鉄蔵　おやじさんのおめがねに叶うかどうか、おうかがいしたくて、つれてまいりました。

お直　お初にお目にかかります。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com